



昭和44年(1969年)

2月号(No. 284)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

会員通信

村山雅美隊南極点到達.....	1
ポールへの道.....	1
メンドサより.....	6
ひとり旅の楽しさ.....	8
私の山歴.....	8

行事

登山講演会報告.....	2
山と私そして仲間たち.....	2
学生登山のあり方.....	2
登山文化論.....	2
この一本展解題下.....	5
ブラーターインゼール山岳会.....	7
UIAA旅日記②.....	7
年次晩さん会の写真.....	8

図書室便り

新刊図書受入報告.....	10
定期刊行物受入報告.....	10
地図受入報告.....	10
海外登山研究会報告書.....	4
日印婦人隊報告書.....	10

研究・随想

ケルバン博士講演会②.....	3
もえるナナカマド.....	6
愛鷹山雄考.....	9
佐渡の石地蔵.....	9

会務報告

十二月常務理事会.....	10
一月理事評議員会.....	10
一月常務理事会.....	10

小集会お知らせ

第二四九回小集会は二月十九日午後六時半からルームで行ないます。内容は次のとおりです。

講演「東北の山」

宮城支部長伊達篤郎氏

映画

①蔵王春秋・35分

②栗駒山日記・30分

③樹木物語(入賞作品)・25分

④遭難出動・25分

村山雅美隊、南極点に到達

第九次南極越冬隊の極点旅行隊村山雅美隊長以下十一人の一行は、昭和四十三年十二月十九日午前十一時(極点基地時間同年後二時、昭和基地時間午前五時)南極点にある米国のアムンゼンスコット基地に元気に到着した。昭和基地を九月二十八日極点旅行に出发してから八十三日目であった。一行の極点到達は明治四十五年白瀬中尉隊が南緯八十度五分まで達しながら引き返してから、日本人による五十八年ぶりの壮挙で、一九一一年(明治四十四年)アムンゼンがスコットと劇的な極点到達競争を演じ、初めて極点に立つて以来、地上からの極点到達は八度目であった。しかし先行距離約二千五百七十キロは北海道北端から九州南端まで日本列島を縦断する距離に相当し、従来の各国の走破距離中もっとも長く、未開の地といわれる南極大陸東部の調査旅行は南極観測史上画期的なことと国際的な注目を集めた。

一行は十二月二十五日午後四時半(現地時間)昭和基地に向かい帰路に

つしたが、昭和基地着は二月二十日ころになる予定である。本会と村山隊長の間で次のような電報の往復があった。なお会員川崎巖氏も同行している。

①十二月四日発信

連日のご健闘をたたえるところに極点への往復旅行に成功されんことを心からお祈りします。

日本山岳会々長 三田幸夫

②十二月六日発信

燃料に身をけずり来たり、八十六度もうまい。乾杯晩さん会、村山雅美、川崎巖。

マツヤサロ日本山岳会年次晩さん会、松方三郎宛。

③十二月十九日発信

村山隊長宛、極点到着おめでとう。帰路の成功を祈る。

日本山岳会々長、三田幸夫

④十二月二十七日発信 (注・延着)

極点到達なお返し、古きを温ため新しきを知る。はるかに御健闘を祈ります。村山雅美

⑤十二月二十四日発信

長の道中ともかく南極に着きました。八十三日、千六百マイル、遅々たる歩みの末に内陸調査の収穫は多

大のものありと自負します。夏未だしの南緯七十五度七十七度では零下六十度と三千七百メートルの高度にいきさか予定も狂い、雪上車の命脈を気にしながら、いうなれば小生の車六〇四はむちゃくちゃにサストルギをつつ切り、深雪にあえぎ、リードせざるを得なかったところから、さしもの南極の内陸も二十四時間照る太陽に暖ためられ、零下四十度は零下四十度のほり、そりほり滑りました。半日の観測と車輪整備をレギュラーに続けて南極に着いたのです。

しかし極点はいまや先人の苦闘をしのぶがさらになく、われわれは迎え入れられて「サウナ」にはいり、「クラブ90」でビールの杯をあげる極点です。わずかにバードが一九二八年極点飛行のとき着いたセーターが先人の体臭をとどめているばかり。きょう二十四日朝をもって整備を

終わりました。「行きはよいよい、帰りはこわい」ということを実は期待しています。すでに南極の中央部には秋のきざし、いまは久しぶりの風雪です。「ホワイトアウト」に悩まされる時期にはいつてきたようです。極点で文字通りの「ホワイトクリスマス」を迎えます。あしたは二日酔いの人々に見送られ、進路を東経四十度線に乗せ、極点を一メートル離れてはじめて進路は「ノースパス」になるわけです。コンパスの針に頼らずともシニブルをたどれることを期待して、二月末、残す千六百マイルをなんとか走りこんでフジの待つインド洋に出たいと思っています。ちようどここの極点は、太平洋、大西洋には六百マイル、「一番遠いインド洋まで千六百マイルのサーフエース・トリップか」と基地の連中に同情され、かつ極点からプラトール基地の飛行機にのって、はわれわれのシニブルは「グッド・ナビゲーション・アイド」だといって、途中サンドウィッチや何かの投下してくれるそうです。

では桜咲くころお目にかかることを楽しみに。さよなら。村山雅美

ポールへの道

川崎 巖

おかげさまで小生十二月十九日ポールに到着いたしました。八十度からは極高気圧の中心に入り、無風快晴続きで、心配していたサストルギも未発達、軟雪地帯もなく快調(単調)そのものでした。気温も零下五十度台から三十度台にのぼりました。一度を四十八キロ、四十八キロ、二十四キロの三日間のペースで狂いなく進みました。全員に余裕があらわれ、単調さからく退くつも三十数種類一人一日一・五キロ(フックスの場合二十種くらい)の食糧でごまかすことは簡単です。

ポールに着いても山のピークに達したような感激はありませんでした。ただはるけきもきつものかなとふり返っています。機械文明の利器を最大限に利用して達しましたが、飛行機でなかったのがせめてもの慰めです。そうかといってこの水厚を知らなければどこかここを大それた人引きそりで旅行するだけの精神的、肉体的資質はなさそうだと痛感します。

(加藤宛)

「登山講演会」報告

本会指導委員会と学生部主催の登山講演会が昭和四十三年十一月九日午後一時から池袋西武デパートのファウンテンホールで行なわれた。約三百人の来会者があり、ほとんどは学生であった。加藤泰安氏の総合司会で第一部が三田会長、桑原武夫氏の講演、第二部は学生登山の問題を中心に藤田佳宏、浜野吉生、金坂一郎の各講師がそれぞれ問題点を提起し、参会者と質疑応答をやり、午後五時の定刻まで熱心な討論が行なわれた。

山と私そして仲間達

三田 幸夫

今年の五月、芦崎の志鷹光次郎君といっしょに雪の雄山に登った。大分前から体の調子が悪いということだったが、わざわざかけてくれ久しぶりに旧交を暖めることができたのは嬉しかった。

室堂での一夜、「三田さんは立山の生き残り、雄山の神様には是非お詣りしなくちゃ」という彼のすすめで、四十何年ぶりになつかしい雄山の頂上に立ったわけだ。

この日は天気が非常によく、風もなく、山々の姿は昔と変わらなく、二人は祠の前の岩に腰を下ろし、飯を眺めながら、時のたつのも忘れて話し合った。遠い学生時代、各大学山岳部の間

で、積雪期の飯へ登ることは一つの大きな課題であった。当時雪の山は、三千メートル級の山ともなると、どうしてもその山麓の猟師を雇う必要があった。

僕達が初めて飯に登った時、光次郎君も仲間の一人として、終始健闘を続け、その計画の始め、登路を決める時、歐洲から帰って間もない横さんの意見を聞いた。そして僕達は、氏の意見に従い、苦労が多くとも雪崩の危険を最小限に避けられるだろうと、鶴ヶ御前からの稜線を辿ることにした。

頂上に立った時、風が強くなり、視界がきかなくなつた。そして長次郎のコールの急な稜線を下降中、雪が崩れて先頭の三人が滑落したが、運よく三人ともコルの真上に止まった。一瞬六人の仲間達は呆然として声もなかつたが、われに還つておたがいにアングザレンして長次郎への下りに向かった。

その時のことを思い出して、光次郎君は「あの時、早月側へ落ちていたら皆駄目だったろうな」と飯をじっと見つめていた。その山行から三月とたたぬ八月の初め、光次郎君は胃がんのため七十三年の命をたつた。雄山では、もうかなり進行していた病苦に堪えて僕への最後の友情に添えてくれたのだ。

山での事故はなんでもない時に起るものだ。マナスルの平坦な氷河でスノウ・ブリッジを踏み抜いた高木君は底も見えない深いクレバスへ落ち込んだ。先を歩いていた竹節君達はなんでもなく通過していた個所なのだ。幸いに竹節君達の機敏で適切な救助作業の結果、高木君は数時間後に発見され九死に一生を得た。矢張り連中はアングザレンをしていなかったのだ。僕自身もカナダ・ロッキーの未踏峰ウーレイの頂上近くの氷河に落ちこん

だ。が、僕は少しも恐怖や危険を感じなかった。前後に、早川君とか横さんのような仲間達がザイルを確保していてくれたからだ。

カナダから帰って間もなく、僕は就職口をインドに求めて長年カルカッタに在住することになった。そして偶然、タゴールの大学に遊学中だった旧知の長谷川伝次郎君に再会した。会ったに二人はヒマラヤについて語り、天幕、寝袋、食糧等についても研究し合った。僕は冬のシッキム旅行を計画した時、器用な同君はわざわざ手製のスキーを贈ってくれた。

雪がなくて役に立たなかったが彼の友情を忘れることは出来ない。その彼の著「ヒマラヤの旅」は余りにも有名である。そして彼の話が堀田君達立教のナンダ・コット遠征の動機の一つとなつたといわれている。

近年、日本からも珍しい数の登山隊が海外へ出かけていく。いずれも日本の登山隊という矜持をもつて恥かしからぬ行動に終始されたい。日本も今日では、海外遠征登山にはかなりの経験を積んでいるので、先輩達の意見等を充分に聞いた上で、小さくても立派な隊を編成して行かれることを希望する。同時に、日本にも立派な山が沢山ある。山と時期（シーズン）それに好い仲間を選んでの楽しい山行を永く続けたいものである。

学生登山のあり方

浜野 吉生

最近の学生登山は衰退しているといわれる。私も確かにそうだと思う。たとえば部員数一つ例にとってもそうである。一時は二十人以上もいた学校でも現在では十人を割るところが多い。部員数で衰退をうんぬんするのは早

計かもしれないが、良い現象であるはずがない。

部員数が減っていることについて、大学山岳部の訓練がきびしすぎるからだという声をよく耳にする。しかし訓練のきびしさに原因を求めるのはマト外れだし、部としても能がなさすぎる。現に、山岳部と同じようにきびしく訓練している同好会が状況を呈している例はいくつもある。問題は山岳部に魅力がなくなつたことではなからうか。

魅力の喪失は、学生山岳部が目標を見失い、目標を遂行する過程での協力や切磋琢磨、山での楽しさを分かち合うことがなくなつたところに原因がありそうである。

魅力のある部づくりをそれぞれの大学が、それぞれの実情に合わせて考えようではないか。

早大山岳部を例にとつて恐縮であるが、わが部では三十二年明神の遭難以来、十年間に十人の仲間を失った。その間、続出する遭難に休部はもちろんだ。このため、学生の頭からは常に遭難という心が抜け切らず、学生らしい若さにあふれた山登りはとても望めなかったのである。

こんな部を、いかに立ち直らせたらよいか悩まされた。私は再建の道には二つの方法があると思う。一つは一步後退して基本から一つ一つ直すという方法。もう一つは、とにかく前向きな姿勢で当ると云うこと。たとえば大きな目標を持ち、それを遂行する過程で部員に自信をつけさすという方法だ。

私は後者を選んだ。そして春山合宿を、全部員参加のもとでイランで行なうという目標が掲げられた。OBと学生の話し合いの中から出てきたこの案は、最初のうちこそ学生は受け身のか

たちだったが、自分達の手で準備を進めて行くうちに、自然と下から盛り上がる力となってきた。学生たちは大きく反応したのである。

遠征は成功し、学生達は未知の山に登る喜びを身を持って体験した。こうして、それまでもすれば沈みがちの学生たちの気持は、大きく転換した。山は技術的には冬富士と変わらず、そちらの方の収穫は無い。しかし、海外合宿という目標を成し遂げる過程で、部員は大きな自信を持った。当時の下級生は現在部の首脳陣となつて、自信を持って下級生をリードしていることを見てもわかる。一つのケースとして参考になれば幸いである。

登山文化史論

桑原 武夫

登山史論については、日本でもっと研究されるべきだと思う。私が『登山の文化史』を書いてからも十八年になる。西洋では立派な史論が出来上っているが、日本ではそれ以後、失礼な言い方になるが、私の本を無用に見せしめるような本が書かれていない。

日本は世界でもっとも登山が発達しているのに不思議なことだ。山登りとは文化人のやる仕事である以上、歴史を知る必要があるわけだ。

さて山登りとはなにか？ それは一定の文明まで到達した人間の行なう文化的行為であるといえよう。狩猟採取生活者においては登山は無い。たとえばキリマンジャロに登ったのは欧州人であり、エベレストもヒラリー、ハントがいたからこそ、テンジンらが登り得たのである。ここに文化的行為としての登山がある。

絵、詩、建築を作ったりすると同じように、登山も一つの営みである。こ

ういったアート（芸術）と登山は共通した点がある。両方とも非実用的な無償の行為である。たとえば小説を書いたら本にすれば印税がはいり、しかしこれが小説を書く本来の目的ではない。登山も芸術の目的もこれと同じこととがえる。また芸術も登山も社会生活をしている反面、反俗的精神——いかにすればローマンチックな行為であり、だから急行列車とバスを利用してとんぼ返りする山行は、登山ではなくなる。英国人のリバーズ・スチーブンはその著書の中で「山では数千人ももの人吸ったのではないところの空気を吸うことができる」と述べている。缶缶で吸う空気は四、五人で吸った空気であり、エベレストを初登頂したときの空気はバーজন空気である。登山にはいつもそうした反俗精神がある。

一方、消極的に考えると逃亡という言葉が当てはまる。不潔な世の中から山へ逃げる。こういう気持は芸術家にもある。詩人は象牙の塔にこもるといふのはそういう意味である。こうして登山と芸術は共通したものがあつた。芸術がいつ始まったかを決定するのは困難である。しかし芸術は文化社会が出来なくては存在し得ない。中国古代の殷の王朝が出来てからは明確にすぎた。芸術が存在する。登山も同じである。欧州では紀元前八一年にマケドニアのフィリッパ王がハエムス山（二八〇〇メートル）に登つたのが始まりで、近代的登山が始まるのはルネッサンスからである。自覚した芸術を持つようになったのは近代で登山も近代からである。しかし、現代ではこういふ登山、芸術という営みが、マス、ソサエティになることによって選ばれたエリートだけが行なう純粹行為ではあつてなくなつた。大衆芸術の時代となつてきた。

登山の方も同じである。山登り集団はしだいに前述の純粋性を持たなくなると大衆に移行してしまふ。

それには多くの理由があるが、そのものもつとも明らかなものとして、広告と政治権力が考えられる。昨年の日本の広告量は五千億円といわれる。日本がその広告が芸術家であるかかわる。そのいかに広告権に影響を及ぼさぬはずはない。政治権力がまたしかりである。登山において、むかし武田信玄が富士山に登ったのは純粋登山ではなく、もっぱら政治権力を誇示するためであった。エベレストに登るにも国家権力の庇護が必要だということになる。

日本は今エベレスト遠征を計画している。この場合、新聞社なり政治権力が切り離して考えられるであろうか。登山も芸術もこの科学技術に支えられ、日々はげしく変化してゆく大衆社会においては、変化を余儀なくされていく。

~~~~~

五十嵐高志

ケルバン博士講演会 ②

風雪に基因してなだれ発生の危険度が高まる場合——こういう場合が最も一般的でしばしば起るのであるが——

先ず旅行地域内の或る地点で危険限界に達し、次に全地域が危険にさらされるようになります。と同時に谷底にまで単独のなだれが崩落するようになり、交通機関が脅やかされ始めます。さらに降雪が継続すれば、破滅的（大災害）規模の全般的ななだれ危険にさらされることになります。

このような場合には、旅行地域におけるスキーは、実質的に不可能になってしまうし、スキーヤーも、とくく

の昔にこのような地域から引き揚げてしまします。

## ケルバン博士講演会 ②

五十嵐高志

このような理由で大災害の起り得るような事態では、旅行者はほとんどなんらの影響も受けない。

さて、ここで、スキーヤーたちは、なだれ警報の実質的恩恵に浴せないのであるか、という点問題が残ります。

例えば、一人のスキーヤーが、スイス全域を対象としたなだれ警報業務より、もっと確実にしたなだれ危険の度合や危険地点の位置を、スキーヤー自身で判定できぬものだろうか？……このように対する答えは「イエス」ですが、もちろんそのスキーヤーが雪について最少限度の基礎知識を用い、積雪がどのように変化しつかあるかということを知っていた場合の話である。しかし、旅行者たちはたいがい、その旅行計画を山に入る以前に決定してしまいうし、また昨今の旅行者たちは、雪の恐ろしさに対する経験がほとんどありません。

二、なだれ警報のための基本要素

ここでなだれ形成の経過について端から端までお話することは不可能ですが、またその必要もありません。私は、なだれ予報組織の必要条件を明らかにするため、二、三の事実を再考してみたいと思います。ただし、これから申し述べる事柄は、スイス・アルプス・環境条件を前提としていることを強調しておきましょう。だから地球上の他の場所では、これとは別の条件を考慮しなければならぬでしょう。

なだれは次の四組の要因の合成結果であります。即ち、

- 一、地形的要因 斜面の勾配、日射と風に対する方位、地表条件（即ち粗度、植物、湿りの程度が大切）
- 二、気象的要因 降水量（降雪量のこと）
- 三、風、気温、輻射。降水量については降雪強度（一時間当り何センチ降り積ったか……）が大切。

三、積雪の要因 一部気象的要因に關連している。積雪の成層構造、地形上の積雪分布、雪温、積雪の含水率および積雪の力学的性質。

四、積雪条件気象的要因と密接に關係しているもので、積雪密度と強度、約四十度以上の斜面のある急峻な地形において、新積雪、あるいはある環境下の湿った旧雪は、一点から発達する「軟雪なだれ」となって、転落したり、滑落したりします。また、三十度ないし五十度の範圍の斜面で、いくぶん縮った雪の層が、はつきりした破断線に沿いに崩れ、良く識られてゐる「板なだれ（面發生なだれ）」となります。

ある指定された山腹における一方のなだれを解釈し、あるいは予知することは、それが不可能でないとしても、非常に複雑であります。単純、かつ一様な形状の地形に対しては、積雪内部の応力状態を計算し、積雪の剪断強度や引張り強度（これらは、まぢまぢの値ではあります）と比較してみることであります。このようにして、最も弱い積雪層を認定し、またそれらの安定度を特性づけることもできます。しかし、その地勢の僅かな凹凸でも、応力し、その収斂、発散の原因となり、その安定度への影響は予測できません。そのうえで、斜面積雪内の強度分布は、一般には分らないのが普通です。また、上部破断線付近の状態が、安定度を代表しているという仮定がしばしば使われていますが、これは間違ひであります。というのは、初剪断發生の場合、破壊は發生面内のどの地点からでも始まり得るからであります。

現在、なだれ予報組織は、力学的考察のみに頼ることは不可能です。だから測定と観測および体験に基づく半定量的方法が適用されます。

次の四つの要素は明らかになだれ危

|                                                                                                                                                                                                        |                                              |                                                                                |  |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|--|
| <p>           一、新積雪<br/>           二、風<br/>           三、気温<br/>           四、旧積雪の層構造         </p>                                                                                                       |                                              | <p>           ただし、なだれの起る地形の種類は、すでに分っているものと仮定し、地形については何も述べぬことにします。         </p> |  |
| <p>           以上四つの気象、積雪要素を、時間的、空間的に十分詳細に観測すれば、指定された地域におけるなだれ形成の傾向を評価することができま。われわれの経験によれば、新積雪深は一番重要な量で、「平地に二四時間内に積った新積雪の深さ」と定義されています。ただし、ある状況下では、一時間当たりとする場合もあり、また極端な強風の当たらない場所で測るのが最適です。         </p> |                                              | <p>           ひと続きの降雪中の新積雪の深さとなだれ危険度との関係は、次の表の通りです。         </p>               |  |
| <p>降雪量となだれ危険度の関係</p>                                                                                                                                                                                   |                                              |                                                                                |  |
| 新積雪深                                                                                                                                                                                                   | 危険度                                          |                                                                                |  |
| 20 ~ 50 cm                                                                                                                                                                                             | 旅行地域において局地的ななだれ、危険になる。                       |                                                                                |  |
| 50 ~ 70 cm                                                                                                                                                                                             | 旅行地域で全般的に危険単独のなだれが谷底まで来襲し、無防備の交通機関が危険になる。    |                                                                                |  |
| 70 ~ 120 cm                                                                                                                                                                                            | 全般的ななだれ危険。無防備の建物のあるものは危険になる。                 |                                                                                |  |
| 120 cm 以上                                                                                                                                                                                              | 高度危険状態。無防備の居住地や、交通機関まで非常に危険になる。予期しないなだれがおこる。 |                                                                                |  |



雪分布とその性質に影響します。風上山腹の雪は、削りとらるる反面、風下山腹では、脆い性質の雪がたぐさん積り、なだれ危険が倍増します。

気温の役割は、そう単純ではありません。マイナス十度以下の気温では、普通、付着力の小さい新雪が積っており、強度や応力状態、あるいは危険状態はそのまま保たれます。マイナス十度Cないしマイナス二十度Cの気温は、積雪が沈降し、締って安定するの

に好都合の条件です。〇度C以上の暖かい気温になると、雪が軟化するのために、再び危険度が増しますが、こういう状態は、一般に長つづきしません。

旧積雪の層を調べると、それ以前数週間、あるいは数カ月の歴史が分ります。しもざらめの形成や弱い中間層は、旅行者にとって危険であります。

というのは、雪面上からは、これら弱い層が見えないからです。このような弱い層が存在すると、新雪が降らなくても板なだれ（面発生なだれ）が起り得ますし、比較的少量の新積雪でも、旧積雪層も含む板なだれが誘起されます。

さて、これらの観測は、容易に接近可能な場所で行いますが、対象とするなだれ地域の標高と方位の値を推定できるようにしなければなりません。

気象の推移は、このように重要な要因ですから、なだれ状況の予知（なだれ警報を行うため、さらに一段さかのぼったもの）は、正しい気象予知、特に期待される降雪の予知に、すべて依存しています。現時点では、まだ観測者の体験が、これらの観測となだれ警報の広報または、なだれ予知とを結び

害の分析により、観測者は自分の判定規準を作っています。しかし、このような体験を数式化しようという傾向もできてきました。観測された気象データ

と観測されたなだれとの間の統計的關係を見出すべきです。さきに述べた、新積雪深と危険度との関係は、この傾向を示す第一歩といえましょう。ジャッカード(Jaccard)は、体験を数字の衣で包むことができるような式に代

入すべき要素が決まり、係数の値を定め得るまでには、まだかなりの時間がかかりそうです。

三、なだれ予報組織の運用  
なだれ予報組織は、第二次大戦中、スイス山岳部隊のために作られました。戦後、この組織の民間利用に供すべく改組され、以来ヴァイスフルヨッホ(Waissflueh)の雪およびなだれ研究所が中心となつて、その運用に当たっています。

一九五一年、スイスが破滅的ななだれ災害に見舞われた際、満足すべき正確さで、この警報を出すことができたが、さらに改善し得ることは明白です。現在の組織は次のようなものであります。

スイスの全山岳地域内の海拔千二百メートルないし千八百メートルの場所に、各三百平方キロメートルに一カ所、合計五十カ所の観測所の網目が張られております。各観測所ではヴァイスフルヨッホの研究所で選定し、立入禁止した地点で、バートタイムの観測者が、毎朝七時ないし八時の間に、一式の観測を行ないます。

観測は次の諸測定からなっています。  
一、天気（一般的特性）  
一、風（強さと方向）  
一、気温  
一、積雪深（積雪標柱による）  
一、新積雪深（二四時間内に積雪板に積った値）  
一、雪温（雪面下十センチ）  
一、雪面特性（慣入性、粗度、クラス

トなど）  
一、観測されたなだれ（形式、数、大きさ、標高、方位、被害）  
一、なだれ危険度の評価（観測されたなだれに用いたものと同じ要素）  
国際気象記号に対応する簡単なコードシステムが、毎日の観測を約五十文字を四個と五個ずつまとめて配列して電報に組み入れるために用いられています。その電報の例は次のようになります。

TOZAN 0901 0715  
7110 3601 96015 1454 0237 8164  
3 71545  
第一行目は、観測所の名前と観測時刻で「アンデルマット (Andermat)」  
観測所の二番観測地点、一月九日午前七時十五分」といった具合で、他の記号の意味は

7110 71 現在天気Ⅱ小雪継続中  
10 雪量Ⅱ10/10  
3601 36 風向Ⅱ北  
9601 96 風力Ⅱ非常に弱い  
96015 9 見出し番号最重要データ群

60 気温Ⅱマイナス十度C  
15 新積雪深Ⅱ一五センチ  
1454 145 積雪深Ⅱ一四五センチ  
54 雪温Ⅱマイナス四度C  
0237 02 雪面の性質Ⅱ一部変質した粉雪

37 雪面の形Ⅱ波状  
一キログラム抵抗の深さⅡ三七センチ  
8164 8 見出し番号Ⅱ観測されたなだれ  
1 なだれ形式Ⅱ面発生乾雪  
1 なだれ  
6 斜面方位Ⅱ西向き斜面  
4 標高Ⅱ千五百ないし二千メートル

3 個数と被害Ⅱ単独の大きななだれ、物質的被害

71545 7 見出し番号Ⅱ予測される危険  
1 なだれ形式Ⅱ面発生乾雪  
5 最も危険な方位Ⅱ東  
5 発生標高Ⅱ千五百ないし二千メートル  
5 危険度と傾向Ⅱ非常に危険、危険度減少中

観測者は、この電報文を電報中央局宛に、早速電話で口述します。なだれ通信」という見出し以外、この電文に何も付記する必要はありません。この電文は、電報中央局からチューリッヒ(Zurich)のテレタイプセンター宛に送られます。そこで、全観測所から到着した五十通の電文を地区番号順にテレタイプに入れ、一枚のチャートしてヴァイスフルヨッホの研究所に送信します。毎朝九時十五分ごろまでには、この情報を処理し始めることができます。ヴァイスフルヨッホに、毎日のなだれ通信が到着した後、専門官は一定の書式に主要特性を記入し、新積雪、深・気温・風の条件・観測されたなだれなど、重要な数値を地形図上に打点します。そして各量について、等価曲線を引きます。月に二回、凡ての観測者は、立入禁止した観測地点で地面まで雪を掘り、雪層構成やラム抵抗と測定結果は、グラフ形式でヴァイスフルヨッホの研究所へ郵送され、旧雪層の耐荷重容量の解析が行なわれます。ヴァイスフルヨッホの研究所の専門官は、なだれ警報の文章を作り始める前に、チューリッヒの気象台に電話をかけ、最新の気象情報を問合せます。かくして専門官は結論を引き出し、なだれ警報の草案を大急ぎで作ります。

この警報では国内各地区のなだれ危険の現況および、今後の見通しについて説明すべきです。

このようななだれ状況の分析は、十二月一日から四月末ころまで、連日行なっていますが、警報は毎日ではなく、毎金曜日、また状況が実質的に変化した時だけ発行されます。この状況変化というものは、危険増大と安全度増加の両方向を含みます。平均して毎週二ないし三回警報を発行しています。

第六回海外登山技術研究会報告書頒布  
昭和四十三年四月二十八日から五月一日、千寿丸原の文部省登山研修所で開催された海外登山技術研究会（山二七八号九ページ参照）の報告書がこのたび刊行された。今回の報告書は従来のものに比して充実した内容で、A5版二百十二ページに及び、内容は、ヒンズークシュに關する三編のほか、地図の作り方、特別研究報告「ランタン谷の解明」、研究討議の報告には、ランタン谷の解明、ヒンズークシュの問題点、ネパール登山問題、海外登山における遭難とその対策の四点が収載されており参考になるし、海外登山の遭難年表も役に立つ。ほかに高処医学文獻集、一九六七年度海外登山年表、参加者名簿が載っている。

なおこの中で「ランタン谷の解明」は田中榮蔵氏の労作になるもので、スケッチ二十枚を含む貴重なレポートである。

頒価七〇〇円（送料とも）希望者は左記へ申し込めば入手できる。（昨年までは本会で取次いでいましたが、今回は直接日山協へお申込み下さい）  
記

東京都渋谷区神南町二十五  
岸記念体育館内日本山岳協会  
（電）四六七一三一一

（4）

## この一本展解題・下

## エヘレストへ登った人に

## 教えられた三つの本

- 「ブローカー」  
 André Maurois の *Ariel ou la vie de Shelley* (B. Grasset 版)  
 (或は *Ellia D. Arcy* の英訳本)  
 — 一九二四年登山に持参。「大へん興味深く読んだ」とペンズン宛の手紙にある。
- 「ペンズン」  
 George Borrow の *Wild Wales - Its People, Language and Scenery* (The World's Classics)  
 — 一九五三年登山の時、サウス・ホルム、二六、〇〇〇フィートの高所でのんびり読む。
- 「ノイス」  
 Matthew Arnold の *The Scholar Gypsy* (Pelican Lib. の *Book of English Poetry* 中に掲載のを)  
 — 一九五三年登山の時、身に泌みて読んだ。
- 「アリエル・シェリーの生涯」(英語読み「エリエル」)の英訳本は一九二四年に出ています。マロリーのイギリスを立ったのが二月末ですから、或いは前年に出た原書を持参したのではないのでしょうか。マロリーはこの本の感想をいろいろ述べ、あと続いてシェリーの詩を読んでいることが、ペンズンへの手紙の中に書いてあることが、デイヴィッド・バイの「マロリー追憶」に出てい

ます。シェリーは一八八一年イギリスを去って、イタリアに移り、再び故国へは戻りません。自然の力と美しさを多く、その詩に述べ、そのモンブランの詩は、ノイス編集の *The Climbers' Fireside Book* (1964) にも出ています。

「ボロウの「ワイルド・ウェイルズ」」  
 (初版は一八六二年「三巻」刊行)のことは、ハントの「エヴェレスト登頂」のサウス・ホルム(二)の章に、ボディンとエヴァンズが翌日早く出発するので、天幕の中を楽に使えるようにと、別の小さい天幕に一人移ってこの本を読みながら、ゆっくり、その日の午後を過ごしたことが出ています。

ボロウのこの旅行は一八五四年の夏で、ボロウはウェイルズ語にも詳しいので、行く先々のいろんな人々と語り合う趣が、まるで録音をとったように、直接話法で述べられ、どのページから読んでも楽しいです。スノウデンへ登る趣は、前記のノイスの「ファイアサイド・ブック」の中にも収められています。

「アーノルドの「スロー・ジブシ」」  
 Joseph Glanville の *Vanity of Dogmatizing* (1661) の物語りを、オクスフォードの静かな景色を背景に、牧人に、きかせる形をとったエッセイ風の詩で、後半には「アーノルドの人生観が表れます。ノイスは、その著書「サウス・ホルム」の中でこの詩を

…… I have never read so well as on that sunny morning…… と書いています。そのあとにある *Thyras* (サーシス) はアーノルドの友人 Arthur Clough (クロア) の死を悼む詩で、イギリスの代表的エッセイの内の一つにあげられています。アーノルドは、スイスの風物

を愛し「オベルマン」の著者セナンタールを追想する詩や「スウィツァランド」などの詩を書きました。Switzerland の中の *The Terrace at Berne* の一部もノイスの「ファイアサイド・ブック」の中に出ています。

(田辺主計)

## 「雑書解題」

本を漁るということ、近頃あんまりしていない。客れ場所で行詰ったからでもあるが、そろそろ戦線を縮小せねばならぬと考えているからでもある。これも一つの老化現象かと、自分ながら考えないではないが、なるだけ身軽にして、仕度のことだけに集中したいと思うからだ。だが、それこそ正に老化現象じゃないか、といわれれば、何をかいわんやだ。

だから「この一本」を出せといわれても、大したものが出せるわけはない。それに「一本展」と看板が上つていのに、どこどか担ぎこむのも興のさめるわざだ。だが、少々店を賑わしたいからとの主催者のことばもあり、漫然と、身近にころがっているものの中から、数点を選んできた。

## 「Itiner alpina tria」

Johanne Jacobo Scheuchzero

London 1708

ヨハン・ショイヒツェル (1672-1736) の著、アルプスの自然誌とでもいうべきものか。アルプスには鱒のある竜が棲んでいると書いたのはこのショイヒツェルだが、この本は彼の他の著述と異なり、ラテン語で書かれている。ロンドンで出版され、ロイヤル・ソサエティに献ぜられたものだ。ラテン語ではぼくには猫に小判も同然、ただ銅版の挿絵がなかなかいい。

二「西蔵経歴談」二冊  
 (河川慧海 1903)

「大秘宝国の探検」という題を掲げて大阪毎日新聞に掲載されたものの切抜帖である。東京では同じものが時事新報に出たというのだが、挿絵など果して同じものであったかどうか、對比したことがないのでわからない。

## 三 富士山

(小川一真 1912)

富士山の写真集である。但し写真は小川一真一人のものではなく、他に江波、玉村などの名が見える。江波といふと横濱で開業して江波と同一人かと思われるが、この人は、日本山岳会の会員のためには、たくさん幻灯のスライドを作っているから、その名を記憶している人もいろいろ。江波はスライドの着色がうまいと、ひところは、海外までその名を謳われた人物だが、カラー時代からいえば、正に、神代の話である。

小川一真は丸木利陽と共に、肖像写真師としても広く名を知られた人である。子供の首のところにうしろから鉄の支えをかけて写していた時代のことだから、これも大昔の話だ。

## 四 The Pacific Cordilla, Vol.

(Kojima Library) I-II

第一冊の扉に「小島島水編輯、全式拾式巻之内、初篇」小島さんの合衆国書きこまれている。小島さんの合衆国滞留は一九一四年から一九二七年までの長きにわたる。この二十二巻の記録集はその在米中、シェラ・クラブの会報など山岳関係の雑誌類から抜き、項目別に分類して製本したものである。一冊毎にタイプで、打った内容目次がついており、その丹念さが、そぞろに亡き島水翁を偲ばせる。全体で二十二冊あったことは小島さんの書きこみでも明かであるが、現在ぼくの手元にあるものは、その中の二冊を欠いている。

## 五、魯国紀行(残欠)

(西徳二郎 1893)

西徳二郎 (1867-1912) については、あらためて説明の必要はない。彼の「中華細紀事」が一八八六年に出ていたこと、それが一九一一年にイタリアの地学協会からイタリア訳で出ていたこと、そしてこの記録が当時における中央アジアの權威として内外

—— といいたいが、内の方は怪しく、むしろ外の方で高く評価されていたこと等は広く知られている。あれだけの記録があるからには、きっと詳細な日記があったに相違ないと、探しまくった幸句、ようやく手に入れたのがこの「魯国記」残欠の一片である。これだけのものが昔の人達の仕事振りがよく出ている。

徳二郎の後嗣である西一男はロサンゼルス・オリンピックの馬術選手として名を馳せた快男児だが、硫黄島で連隊長として果てた。何かおやじのものがうちにあるだろうと、ぼくは北満の牡丹江に、彼の戦車隊を訪ねたことであるが、そのときは、彼の部隊は既に南方に移動したあつた。

## 六、フーレルに与えた登山記録

(チャールズ・ブルース 1912)

アルプスでは、正規の山案内として登録しているものは、「山案内人」手帖を持っている。雇主が「山終ると、自分の感想などを添えて、記録を書込んでやるのである。山案内としては、えらい人と一緒に山に行ったという記録が、その手帖に残るか否かは、出世の上からいって大問題なのである。初期の有名な山案内、アンデレックとかアルマーなどの手帖には、開拓時代の巨人達の名前が、ずらり列んでいるわけだが、現在でも山案内をやっている連中は、自分の手帖を見せて、お客に、自分の経験や手腕を知ってもらっている。

ところがこの、ブルースがハインリヒ・フリーレに与えたものはただの市販のノートブックに書込んだものだ。ブルースが、ラフル・ヒマラヤを歩いたときのものだ。ヒマラヤにはアルプスの案内手帖のようなものがない。そこでブルースはわざわざこんなノートを書いて与えたのである。グルカ兵の間では神の如く慕われていたというブルースらしい心遣いである。

フリーレはアルバータ初登頂のときのチーフ・ガイド、その後秩父宮がアルプスを登られた時も、クスタードから馳せ参じた。

このノート・ブックはアルバータ遠征隊の土産の一つだが、こんなものがあったことを知っている人は少ないかも知れない。

## 七、エヴェレストをめざして

(ジョン・ハント)

和訳本には相違ないが、点字だから、われわれは読むことはできない。ロッド・グレーは晩年目が見えなくなってきたから、いつも寝床の中に点字本を持込んで、読書を楽しんでいたというのだ。目開きは不自由だ、といったかどうか、とにかく寒いことにかけては北極だしの英国の寝室のことだ。毛布でもたまりとかならねば凍え死するほかにない。こうなると手さぐりで寝床の中に持込んで読めるグレイにはかなわぬ。

ところで、ハントの『エヴェレスト』なんかを読むが、目の見えない人になるのかときいたら、失明した人の中には、あした探検ものの好きの人がなかなか多いのだということだった。その話をきいたときぼくは、ほんとうに、あれを訳した甲斐があったと思っ

た。

ロッド・ハントは、自分の本の外国

語訳を片っぱしから集めているといっていたから、この点字本も一部送ってあるが、ほかの国でも同じようなものができていて、彼のところに行っているかどうか、今度会ったら聞いてみたいと思っている。

(松方三郎)

## 一枚のハガキ

著者 少雨荘交遊録  
發行所 斎藤昌三  
梅田書房

「書斎の怪人」アルビニの手記「偶松の匂い」等の出版を手がけた、書物展覧社社長の約二百名にわたる交遊を述べたものだが、この中に小島島水老の「山水美論」出版の折り、老が半紙へ毛筆でセツカチに書きなぐった原稿のために、植字工がどうにも判読出来ず斎藤昌三氏が浄書したと言う出逢いが書かれている。

この本は三百部限定版であり、本の見返しに交遊した中の一名のハガキが貼付けてあるが、有り難いことに、貼付けてあるハガキは小島島水老のものである。まさに三百部限定本中の一冊の本である。

(細井隆司)

## 不二山道知留辺前編

柳下徳次郎校  
松岡梅彦輯

この小冊は、三年前の古書展の折に古雑誌類の中から見つけたもので、70の鉛筆がきの直段に、ひそかに胸はずませた記憶がある。

残念ながら表紙や見返しの部分が失われて完璧なものではないが、江戸末期の北吉田口を案内した内容は、地の利を得て登山本道の称を与えられたこの口の繁昌ぶりが想像されて非常に面白い。

さりながら、前書きの最後に「当山

は例年朔日をもって山びらきといひ七月廿七日をもって山仕舞といひされども強て登山する者は三月下旬に二合目にいたり九月月上旬に五合目まで至るといふ」とある。

近年、十一月の連休どきの、われもわれもの吉田口大沢の混雑ぶりをみせたら、編者も動転仰天するに違いない。

小林義正氏のお説によれば、後編はおそらく未刊との由である。

(松永敏郎)

## 辻村さんを偲んで

辻村伊助さんが関東大震災で亡くなられてから、もう四十五年も経った。箱根湯本の自邸で、ローザ夫人と三人のお子さんたちもろとも山崩れのために、一瞬にして不帰の客となられたことは周知の悲劇である。この不幸な最後については、梓版「スويس日記」や「ハイランド」に寄せられた親しい山友の追悼の文章で詳しく語られている。

「続スويس日記」の原稿は、辻村さん一家を運び去った泥流のなから発掘されたものだが、蔵書や写真機が遺言書の記された日記帖とともに出てきたこと、小島さんは記していられる。

ここに持参した数葉の古びた印刷や絵葉書も、その折りの泥にまみれたなかから拾い出されたものに違いない。これが、辻村さんとは時代を異にする私の手許にあるのは、辻村家と縁のある友人K君が、梓版の出た昭和の初期に譲ってくれたからで、爾来、「スウイス日記」のなかに挿んで大切にしてきたものである。

(島田 巽)

## 燃えるナナカマド

畠中善弥

登山の際新雪で垂れ下ったナナカマドの枝先きに朱い実をつけた紅一点の場に接することがよくある彩色のとほしい冬の風景に美しい詩情をそえるひと駒に出あうことは嬉しい。

ナナカマドは喬木帯から高山帯にかけて広く分布しその種類も数種あるようである。

所でナナカマドの由来名で通説には炭焼きが製炭の際ナナカマドをかまどに投入してもなかなか燃え難く七度びかまどに入れたということから出た木名であるとなっている。それにしても私が腑に落ちないのは炭焼爐の中は一〇〇度内外といわれる灼熱のルツボである。燃えない木なんてあるはずはない。しかも燃えないので七たびもかまどに入るとおおよそナンセンスだと思った。ひとつテストしてみよう

と思い立ち晩秋炭焼場近くにあるナナカマド、ナラ、ブナそれに岳カンバを加えて燃焼試験をしてみたのである。樹はそれぞれ伐採三日目の生木、長さ丸みなどほぼ同寸法のものでレンガ造りの自宅のかまどを使いよく燃える薪の中に投入して正確なタイムをとった。

また投入約五分にして岳カンバが燃え始め十三分にしてブナが燃え出し十五分後にナナカマドとナラが殆んど同時に燃え出した。そして投入約二十五分で消火した。このテストでナナカマドは一般の堅木(ナラ級)と同じ時間で燃えることが実証されたのである。

ではどうして七度びかまどに投入するナナカマドになったのであるうか。私考するにナナカマドは四季を通じてその丹麗な美しさは高山の名木として名あり、殊に製炭が多く行なわれる秋には紅葉と朱い実の美しさはまた

格別なものがある。

炭焼きがかまど入れに当りその美しいナナカマドに斧を揮うことをためらいついに七日にわたったということがナナカマド木名の因と思われるのである。なお参考として当地で永く製炭をやっている炭焼A氏の話によればどんな木でも一回のかまど入れて燃えないものはないという。ナナカマドもナラと同様白炭良材となっている。最も燃え難い木はミズギでナナカマドなどより時間を食うことである。ちなみに牧野植物図鑑によればミズギは樹液多きにもとずく和名であると書いてある。

## メンドサより

川上 隆

12月14日、国鉄鉄道にて、アルゼンチンのメンドサに到着いたしました。サンチャゴと比較してメンドサはステップの気候のため、強い日射しを感じますが、汗は余り出ません。街はプラタナスや桑の大木が繁り、まさに森の都です。

先発隊は16日、本隊は18日、登山基地やトングガート村にある陸軍第山岳旅団の宿舎に入りました。

19日、先発隊はトヌジャン川二八〇m地点にある軍の小舎に、本隊は21日入ります。

23日より、トヌジャン川源流の山々、セロ・サンファン(六一一m)、セロ・ネグロ(六一五m)周辺にある六〇〇m前後の未登峰を登ります。トングガートの部落から眺める、プラタ(六〇〇m)、トングガート(六八〇m)、ネグロなどの景観は素晴らしいものです。ムーラでのキャラパンを楽しむにしているところです。

(68・12・20・トングガート村にて)

(吉沢宛)



# プラーターインゼルに ある、山岳会を訪ねて

吉沢 一郎

インスブルックでオーストリア山岳会のハンス・ハーフナーと会見してから、一九〇五mの高所にあるゼーグルーベというホテルに泊り、翌日はその支配人の仰せに従い、マリヤ・テレザ通りを歩いて駅へ行き、そこからウィーン行きの列車に乗り、クーフシュタイン、ローゼンハイムを経て再びサアツブルグに戻った。

ドイツその他で活躍しているバイオリニストの塩川悠子さんに駅で迎えられてから、いろいろ面倒なことを頼んだり、手作りの日本食をアドルフ老と一緒に御馳走になったり、その素晴らしいバッハのシャコンヌを聴いたりしたことは、「岩と雪」の第13号に書いたのでここでははしることにする。

## ◇UIAA旅日記◇ ②

(英国、スペインの部) 吉沢 一郎

10・4 (金) 英国山岳会訪問、UIAAで来たといったら、黒人の秘書嬢に親切に歓迎され、くまなく見学出来た。午後、フーカーやダーウィンで名高いキュー植物園見学。ロンドンへ来た他はほろいから、ここだけは来る必要がある。夜から正式にボニントン・ホテルへ移る。

10・5 (土) 午前中はUIAAの常任理事の会議、午後は全員でロンドン・ツア。夕方からランカスター・ハウスで政府招待のリセプション。文部政務次官デニス・ハウエル氏とハント卿がホスト。

10・6 (日) ACで総会、W・デニナが座長。午後ホテルで続行。アルバート・エックラーが次期会長に選

翌る九月二六日は木曜日、キェンシエトラスハウスの支払いは正味四日分で五四〇シル(一〇一四四円)一日平均二〇〇円にならないとはその安いに驚いてしまった。

相変らず早く眼が覚めてしまうので朝食(といってもパンとコーヒーだけ)まで随分葉書が書けた。荷物は宿の主人にア老の家まで自転車にのせてもらっていった。一〇シル渡したら喜んでいった。

ア老はまだ列車の出るまで一時間半ある。MozartwohhausとKollerger Kircheを見にいこうといひ、又ひっぱり出されてしまった。見せ残してあとでうらまれている超親切心のほとばしりからであらうか。

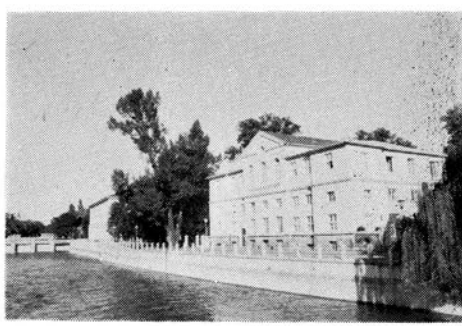
何とかブラッツに出た序でに運動具屋でカダログだけをもらっておく。一時間ばかりで最後の見学も終り、家に戻ってラディッチェニクやその奥さん、アストリッドちゃんとインゴ君

10・7 (月) ユーストン駅より列車でノース・ウェールズへ出発。クリューでバスに乗り換え、カベル・クリューにある登山学校へ行く。正式にはThe Snowdonia National Recreation Centre, Capel Curig, North Wales と言う。ロフデンとロイヤル・ホテルに宿。

10・8 (火) 岩登りその他の実習見学、ランベリス峠からランベリスへ下り、カーネーションの古城見学、ペンゴールを経て登山学校に戻り、講義を聞き、夜おそくバスでホリヘッドへ向う。

10・9 (水) 午前一時寝台列車でロンドンへ戻る。ユーストン駅からボニントン・ホテル、朝食で解散。

につきぬお別れをして、ア老と二人で駅へ向った。今度はタクシーだった。一時四十五分、シエトラスブルグ經由のバリ行き、列車も懐しい名前の



ドイツ山岳会

10・10 (木) 英国地理学協会訪問、内部見学。夜AJの編集長A・ブラックショーの家に招待される。

10・11 (金) ケントンまで地下鉄に乗り、ボーム訪問(ガストン山岳書の後継者、なるほど山の本が沢山あった。

10・12 (土) ロンドンよりマドリッドへ飛ぶ。ホテル・クスコ泊り。

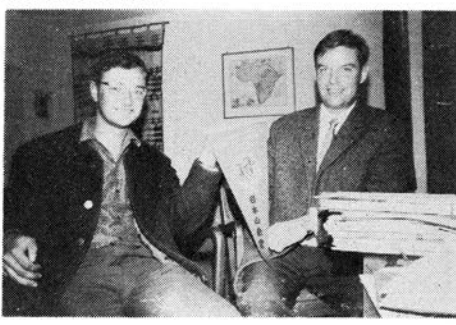
10・13 (日) 塩川氏の社宅で休養。市内見学。

10・14 (月) ムセオ・デ・ブラード見学。ゴヤ、ルーベンス、ベラスケスなどの本物を見て感激。夜ホテル・クスコでスペイン山岳会の幹部と会見。

モツアルト号、これで当分ア老とお別れである。一つ上だけのア老と、お互いに頑張ることを誓いながら最後の握手をし、列車が動き出すとともに帽子を振り合った。

気がつくとき、nicht raucherに乗っていた。尤も通路に出れば吸えるのは知っていた。国境を通過する時にはパスポートが点検されるが、切符も荷物も調べない。

沿線の右側には牧場と畑が広がり、左



ハウザーとリンズバウワー

手にはずつと低い山がづらなっていた。ローゼンハイム、オスト・ミューンヒエンを経て主駅には一時一五分に着いた。サアツブルグからたった一時間半である。

トレイガーに荷を持たせて一時預けへ行って五マール出したらそのまま持つて行きそうになったので、ナインと睨みつけると渋々と釣り銭を出した。駅のおイローバザールへ入ってパンとコーヒー。同じテーブルにあとから来て腰かけた老女二人が、私のパンをさつさと食べる。妙な風習もあるもの

である。そして白い腸詰めとビールで昼食が、本当のミューンヒエン式だと説明していた。

タクシでプラーターインゼル(Praeterinsel、遊園島、イザール河の川中島である)に向う。ドイツ山岳会(DAV)の住所は、8 München 22, Praeterinsel 5, West Deutschland なのである。

ミューンヒエンは今、大通りも横町も掘りつかえしや田舎から来た人であった返っている。地下鉄工事(一九七二年のオリンピックのため)と十月祭りが重なったからである。従って自動車も東京のように思うように走らない。運ちゃんがいんゼルの対岸の一番端までつれていったので歩いて戻る。この運ちゃんも同じである。三・九〇DM。(IDMは九〇円)

DAVの建物は瀟洒な白い三階建てで、Alpenvereinshausと呼ばれる。受付で刺を通じたらやがて三階に通された。発潮とした背の高い紳士がニコニコしながら手を出した。最初には誰かと思っていたが、よくみると写真で見覚えのあるギンター・ハウザーであった。

彼といろいろ話しているところへ、フランクフルトの空港で一時間話したゲラルド・グラーバー博士が入ってきた。彼はサアツブルグからシニタイアへ行くという。私もその予定だったG・ハウザーが連れて行くことだったので彼は単独行動をとることになった。

(続く)

## “Mountain Flowers of New England”

H・A・カーターから右記の本を送って来たが、それに、「これらの花が咲いている時、また戻って来ませんか」とあった。御好意は有難いが、だがやはり行ってみたい。(I・Y)

# 年次晩餐会の写真

昨年十二月に行なわれた年次晩餐会のあらましについては、前号でお伝えしたが、上は会場の全景である。なか

なかの盛会であることがおわかりと思う。ちょうど三田会長のあいさつのところで、下はロビーで何か話している横、藤島お二方の長老である。上は羽田栄治氏、下は吉沢一郎氏撮影。



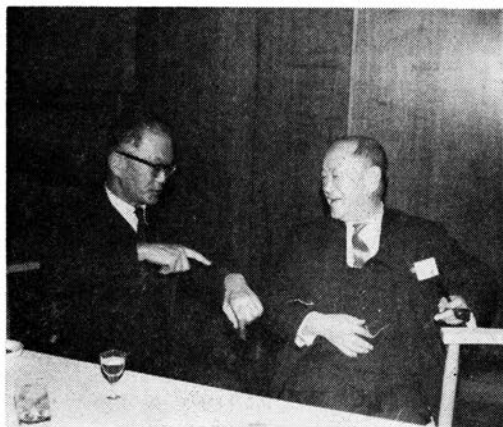
## 私・の・山・歴

田辺多聞

永年の間会員として何かと山を楽しむ上において便宜をお与え下さいまして常に感謝申し上げております。このたび永年会員として表彰して下さいなむき、御通知に接し、予想していなかった光栄に感謝申し上げている次第であります。

十二月六日の総会に出席して表彰を受けるようとの御招待状をいただきましたことに有難うございます。是非出席いたしまして御好意におこたえ申し上げたいと存じておりましたが、年末何かと用件のため出席することが出来ませんでしたことをお詫び申し上げますとともに私としてもこの絶好の機会を逸することとはまことに残念で御座います。

この機会に私が入会させていただきました動機や、私のまことに少い貧弱な山歴などを申し上げまして欠席のお



詫びをいたしたいと思ひます。

大正六年ごろの入会かと記憶致しますが、当時私は京都の三高の学生でした。私の亡父（田辺朝郎）がその親友今村幸男さん（故人、元本会々員）のすすめにより早くから入会しており、家に機関誌山岳があるのを私は興味深く読んでおりました。そのころ朝日新聞の第一面に長谷川如是閑、碧梧桐外一名による高瀬入り、常念縦走、槍に至る山行の記事が約一カ月にわたり連載されており、面白くてむさぼるように読んでいたことを記憶します。

こうして私の山に対するあこがれが目覚まってきました。当時三高にも山岳会が生れ出ており、小島栄さんがその大先輩であり、私の時代には山本宣治氏（共産党の有名な）が三高山岳会のリーダーとして親切な行きとどいた指導をしていました。私はその指導を受けてまず第一回の山行を三高の二年の夏休みに白馬から唐松岳へ縦走するルートを選び、日本アルプスの何たるやを知ることが出来ました。その時一緒に山に行った仲間の中に前の関西経済連合会々長の阿部孝次郎君がいます。

その翌年大町から針ノ木越え、立山剣、大黒、大町という一週間の山旅をして山の醍醐味を味わいました。そういう時代には父に頼んで日本山岳会に入会してもらいました。紹介者は父と、前述の今村さんであったかと思ひます。

折角こういうスタートを切りましたが、その後私の山歴というものはありません。ただおかげさまで山という

のに対する理解と感激を味わうことが出来るようになり、山の記事を興味をもって読み、山の画や写真を楽しみ、また山を眺めて観賞することを知り得て人生を享樂する一つの途とすることが出来るのは、やはり、日本山岳会に入会することが出来たからだと感じ謝しております。

なお私は還暦のとき、いまから十年前、独り富士山に登りました。還暦記念のつもりでした。いまは五合目までバスで行けますから楽ですが、それから先の垂直の千五百メートルの登高はさすがに老年には楽なものではありません。しかし三八〇メートルの展望台は何といつてもすばらしい天恵の展望であり、頂上の一週二キロのグロムナードはこれまたすばらしいものと思ひました。（十二月四日、京都で）

## ひとり旅の楽しさ

小方全弘

三カ月の予定が相当延びてしまひ申しわけありません。ブータン、ネパールと転進し、結構楽しめました。ようやく香港にたどり着きました。おやじが怒っているという女房から手紙で一月十六日韓国に飛び、二週間滞在の後帰京します。

落着いて洪水で失った荷物を調べてみると私個人にとってはかなりダメージでした。でもそれにも増して貴重な経験だったと思ひます。

ひとり旅の楽しさと、ひとり旅の限界というものが少しわかったような気がします。もつともカルカタとか、カトマンズ、香港などはひとり旅ほど楽しいのはありません。しかし山道となれば相当に苦しいこともありました。ブータンはもちろん、ネパールもシエルパなしで歩きました。エベレストは松方さんが来るというので口にしませんでした。（一月十四日山崎宛）



## 愛鷹山雑考(一)

山本朋三郎

愛鷹山は富士山の前山のような存在と考えられがちであるが、高さこそ富士山には及ばないけれども、古くは富士山よりも古い時代に出来上った山である。従って、富士山の噴火に伴って出来た多くの側火山でもないことは明らかである。富士山がまだ地上に現われなかつた頃、箱根や八ヶ岳が盛んに噴火して、造山活動をしていた頃に出来上ったものである。

地形的に準平原に一段と近い丘陵状の台地を裾野に作っている。さらに雨や風の作用で山肌はゆるされ、えぐられて、現在見られるような、ほぼ、円型の放射谷が見事に出来上った。この放射谷は直線的な短距離のカラ谷が多い。このことから、雨の時、愛鷹の山肌を削らずに土砂を下流に押し出し、肥沃な台地が作られてゆく。

その押出された土砂の末端は、駿河湾へと達したが、太平洋の黒潮が駿河湾流となつて、富士川からの砂礫を運んで、田子の浦の海岸を作るのとぶつかる。直線的な、もろい山肌の放射谷の水は、駿河湾に流れきれずに、たまたえられて浮島沼を次第に作って行ったのだという。なるほど、それでは沢山あるわけだし、座り地蔵(ねまり地蔵)はいじわるなというわけも判った。

そこで皆さん、どう間違っても座り地蔵などの死仏を背負いこまないよう願っておきますよ。

さて、前書きが長くなった。新渴泉の内陸に石地蔵は無いからという、そういうでない。有るは有るはいくらでもある。ヒゲの高波さんの近所でも、アメの内藤さんの周辺にもいくらでもある。

愛鷹山の古い呼び名は、『万葉集』の出来た頃には、師追山、師追山と叫んでた。新六帖という書物の中で、衣笠内大臣という人の歌に「しげり行しはせの山の熊つづらくるるにながき水無月のそら」というのがある。梅雨時の六月の愛鷹山越えは、どんよりと、鉛色に暮れる様で少しも暗くならない。行手には熊つづら(馬鞍草)という草がおおい茂って行手をふさぎ、いやな山である。とてもいい山というたであらう。

この、師追山という名前も時代が下って、鎌倉時代の吾妻鑑という本の中には、波志太山とか、なまつて鉢田山とも書かれてある。ハシタ山、ハチタ山のハがアに訛音されて、アシタ山と呼ばれて、これに足高、草高の文字を当てはめるようになった。

「足高」と人は言へども二ヶ根の裾野につづくあし引の山。日蓮上人この上人のうたは、足高(馬のこと)と言うのが足が高くなし、富士山の裾野に低くつづく前山(あしびき)の愛鷹山である。という歌である。

佐渡が島を旅行すると、山頂の祠堂や道内の小祠、寺院の境内など無数の石地蔵を見ることが出来る。首の欠けたのが多いが、五体満足なものもほんの可憐な小型の鉛筆くらの背丈で、材質は花崗岩にまぎっている。この石地蔵は古いのも新しいのも大体同一の形式で、産地も判るが、私はまだそれを売る石屋を訪れたことがない。

よほど前のことだが、松方さんの玄関におかれてあつて、入手の経路は知らないが「おやこにもいたか」と思ったことがある。それほど佐渡の石地蔵は可愛くて小さいので、随分と日本中に散らばって行っていることと思う。それほどどこへ行っても、何処へ置いてもちっとも嫌味がなく、ぽつんとではあるが据りよく納まるのも特徴のひとつであらう。

近ごろ、石仏、石神、道祖神、磨崖仏と写真を中心に専門書が出来上がっているが、私のいいたいのはそんな研究書と関係はないし、土産物売店で販売している新製品の佐渡の石地蔵とも関連していない。ただあるがままの従来の素朴な石地蔵の話である。

終戦直後のころ、内海府の虫崎から山居ノ峠越えて真更川へ出て、彈崎を一周して戻ったことがある。外漁村の賽ノ河原の洞穴へ立ちよつたとき、入口にはセルロイドや木工品の玩具、次には石地蔵、最後の奥には鮑貝の貝、薄暗い岩の隙間にびっしりと差し込まれて鈍い五色の色をみせしめていた。私は突然涙が出て仕方がなかった。鬼にいじめられる亡くなった子供達を慰めてやろうと、母さんや婆さんたちが、子供が生きていたころもあそんだ玩具を供えたのであろう。世の中の安定していたころは、仏教に形どった石地蔵を供えたが、それも無い以前は鮑貝の貝であつたであらうし、戦争で物質の無い時は、その時代の玩具であつたのを思うと、その親心を想わせるものがある、長いことたずんだ。

帰って虫崎で話を聞くと、立像の石地蔵は願事の祈願のため、成就すればまたあげる。もし願事かなわるときは(死んだ時は)坐像をあげて冥福を祈るのだという。なるほど、それでは沢山あるわけだし、座り地蔵(ねまり地蔵)はいじわるなというわけも判った。

その上人のうたは、足高(馬のこと)と言うのが足が高くなし、富士山の裾野に低くつづく前山(あしびき)の愛鷹山である。という歌である。

## 佐渡の石地蔵

藤島 玄

が、どれ一つとてみて、こちらで御免したい。それはその人相というか仏相というか、どれも仏臭い、抹香臭い、泣き面、怒り顔、どれ一つ円満なものがない。どこか据えてみてほほえみながら御対面という場面は想像もできない御面相で、まさにお墓面である。いったいこれは、どうしたことであらうかと、私なりの考えはこうだ。

佐渡の人たちの石地蔵に関する観念

は、地蔵さまよ、賽ノ河原の子供達と一緒に遊んで下さい。地蔵さまよ優しく子供達を鬼から護って下さいと、諦めからくる明るい願いであつたに違いないから、その朗らかな心が石地蔵にも表現され、また、病気のよくない表と明るい方へ導いてほしい願いの表示であつたと思うから、暗い表情を嫌つたと思われる。反面、内陸の石地蔵は、嘆き悲しむ、父母の心が先になつた、そのまま暗い表情の地蔵になつたか、なまじか仏教の教軌を知っているだけに、いわゆる仏面に作ろうとして、下手な細工をこねくりまわした結果にほかあるまいと思う。そんなものはやはり野における石仏である。

ひとつだけ。石地蔵愛好家に穴場を教えておく。新潟県でなく、お隣の県で、電車もバスも行くお寺。お寺から離れた地味だ。佐渡の石地蔵をもっと小さくした六地蔵が、算盤のような長方形の一枚石に刻んだのが、山のように積まれてあつて、青苔がびっしり着いている。それは、それは美しくも可愛いものです。何処でしょう。

「山」 水田健之輔  
ソニー社の裏は松梅御殿山  
泉岳寺雪の仏(香猷花)

(続く)

## 図書室便り

## 新刊図書受入報告(昭・43・12)

あかね書房寄贈

(1) 第Ⅱ次RCC編『積雪期登攀と設営技術(現代アルピニズム講座4)』昭・43・12

(2) 植木毅著『氷壁のシニブル』昭・43・12

第一高等学校旅行部の会寄贈

(1) 『一高旅行部五十年』昭・43・12  
冠松次郎氏寄贈

(1) 冠松次郎著『山溪記 第三巻』昭・43・12 春秋社刊

## 定期刊行物受入報告(昭・43・12)

【部報・会報類】

1 『兵庫山岳』No. 19

2 『国立公園』No. 225

3 『京都山岳』No. 523

4 『明峰山岳会会報』Vol. 38, No. 5

5 『OMCンボード』No. 229

6 『山岳手帳』

7 『山嶺』No. 464

8 『自然保護』No. 78

9 日本山岳協会『海外登山研究報告』昭和43年度(2)

10 日本山岳協会『日印合同婦人ヒマラヤ登山隊一九六八年報告書』

11 『東京農業大学山岳部年報』Vol. 8

12 『山と雪』No. 128

【山岳雑誌】

1 『アルプ』No. 131

2 『岳人』No. 258

3 『HIKER』No. 159

4 『SKI』69 No. 4

5 『山と溪谷』No. 364

13 『RCC時報』No. 12

## Journal Arrived in Dec. 1968

1. Die Alpen, 44. Jahrg. 11, Nov. '68.

2. Alpinismus, 6. Jahrg. 10, Oct. '68.

3. Der Bergsteiger, 35. Jahrg. Heft 10, Oct. '68.

4. Deutscher Alpenverein, 20. Jahrg. Heft 5, Sept. '68.

5. The Geographical Journal, vol. 134 Part. 3, Sept. '68.

6. Österreichische Alpenzeitung, 86. Jahrg. Folge 1361, Sept/Oct. '68.

7. Österreichischen Alpenvereins, 23. Jahrg. heft 9/10' Sept./Oct. '68.

8. Rivista Mensili, Anno 89-N. 7, 8 Luglio-Agosto. '68.

9. Switzerland, No. 2 '68.

10. 地図受入報告(昭・43・12)

Dr. Arnold Gubier 氏寄贈

1. 'Mont Blanc-Grand Combin' 1: 50,000

## 会務報告

## 十二月常務理事会

(十六日午後六時半本会ルーム)

出席者 三田会長、吉沢、深田副会

長、藤井、山崎、飯野、宮下、広谷、大塚各常務理事

△議事

① エベレスト登山の件

② 新役員の件

一 月理事評議員会

(九日午後七時、本会ルーム)

△出席者 三田会長、吉沢、深田副会長、長尾、小倉、川森、広谷、大塚、浜野、丹部、藤井、大貫、山崎、野上、芳野、飯野各理事、沼倉、佐藤、石原、藤島各評議員、堀田監事(委任)、中島、佐藤、高山、伊藤)

△議事および報告

① エベレスト登山の件 (大塚)

エベレスト委員会は今現在事実上解散している。従って理事会で問題を直接とりあげることにした。前委員会の申し送り事項により、しかるべき人を二月中旬カトマンズへ派遣し、現地の状況を確認したい。またエベレスト実行委員会は、参加するメンバーを中心にエベレストに対する外部への窓口は藤井、大塚理事にしたい。

これについて三田会長、藤井常務理事からエベレスト登山が軌道に乗ってくるとの力がそれにかたむき、会本来の会員サービスがおろそかになりやすいから留意したい、との発言があった。

② 四十四年度新役員の件 (大塚)

エベレスト登山を考慮し新役員の構想をねりたい。常務理事会に一任したい。

③ 藤野氏追悼の件 (野上)

佐藤評議員のデザインした立派な磯野文庫のプレートが出来上がったので、これを機会に藤島敬男、望月達夫氏らとはかり、三月中旬ごろ追悼会を開く予定である。

④ 日本山岳志賀刊版の件 (藤島)

野島出版社から申し出があり、高頭家からも一切を委任された。発行部数は千部、予価三千五百円でこの夏ごろ出したいが、山岳会として会報、山岳誌上で会員に知らせ、解説などにつき協力してほしい。と申し出があり、山崎、野上理事に協力してもらうことになった。

会費の値上げを検討している。五十パーセント程度の値上げはやむを得ないのではないかと、常務理事会でさらにくわしく検討し、各支部の意向もきいてみるつもりである。

## 会 員 異 動

住所変更及び住居表示変更は、会員名簿訂正版作成の予定なのでその時一括報告します。

## ルーム日誌(43・12)

6日(金) 四十三年度年次晩餐会(マツヤサロン)

9日(月) 常務理事会

12日(木) 定例理事評議員会

13日(金) 学生部婦人例会

18日(水) 忘年会

20日(金) 吉沢一郎氏を囲む会

26日(木) 常務理事会

年末30日31日休館

十二月中来室者二九一名

以上

## 計 報

武山良次氏(永年会員、会員番号一四四番)昭和四十三年十一月十八日死去された。八十二歳。

(遺族) 石巻市日和カ丘一ノ十三ノ四十 武山二朗氏

本会はずつしんで哀悼の意を表する

訂正 山十二ページ七段四段二行目、および八ページ二段二三行目に村上金吾とあるのは、村上金吾の誤りにつき、訂正しおわび致します。

## 日印婦人隊報告書頒布

日印合同婦人ヒマラヤ登山隊一九六八年報告書が出来た。計画実施までの経過、インド登山財団との連絡、カイルス峰、無名峰、チャンパの登頂、気象、風俗、共同食生活、装備、行動日誌などくわしくまとめられている。地図三枚が付され、九十四ページ。購読希望者には三百円でルームで頒布している。

## 松方氏カトマンズへ

本会のエベレスト登山は一月九日の理事会で一九七〇年を目標にすることと、あわせて、至急要人をカトマンズに派遣することを決定、その後松方三郎氏の快諾を得て、同氏は二十日午後零時二十分羽田発のJAL四六六便でカトマンズに向かった。滞在は約二週間の予定である。

一九六五年ネパール政府は突然ヒマラヤ登山を禁止したが、一九六六年を目標に進めていた本会のエベレスト登山計画も実施寸前延期のやむなきにいたった。

一九六三年、当時の三田副会長をカトマンズに派遣し、ロイヤルティの半額を支払い、許可を取りつけたことなどを考えあわせると、今回の松方氏の訪ネは、解禁の公式発表もあったことから、本会は今よりも、登山界全般に新しい局面が開かれるものと期待される。(大塚)

## 一月常務理事会

(二十二日午後七時半本会談話室)

出席者 三田会長、吉沢副会長、藤井、山崎、大塚、飯野、広谷、竹田、丹部(委任)、深田、宮下

△議事

① 会費値上げの件 (飯野)

理事会から原案作成を一任され、種々討議の結果、本部会費二千元を三千元に、地方会費千六百元を二千五百円



の案に全員賛成、次回理事会に提案することにした。なお常務理事会の決定案を各支部長に連絡して了承を求めることにした。これにともない終身会費もスライド値上げするが、入会金、団体会費は今回はふれないことにした。

②エベレスト登山の件（大塚）  
二月十日約二週間の予定で松方氏にカトマンズを訪問してもらうことになり、目下準備していると報告があった。

③新役員の件（飯野）  
④山岳二十六年から六十年までの索引の件（山崎）  
目下原稿を整理中で千部印刷の予定だが、約五百円で実費販売することにし、次回理事会にはかる。

### あとがき

▼本会のエベレスト登山計画も松方氏のカトマンズ行きで、いよいよ本格的な動きを見せはじめた。昨年の八月ネパール政府は登山解禁を発表したまま、かんじんのレギネーションについてはナシのついでで、関係者をやきもきさせているが、松方氏のカトマンズ行での点もはつきりすると思う。

▼正月の劔岳における遭難さわぎは、例年のことといいながら、ただあきれて毎日の新聞を見ているだけであった。

▼一月下旬雄松堂が新宿の伊勢丹で西洋山岳古書籍逸品会をやった、イギリスからの直輸入でかなり安い。初日まっ先にかけつけたら吉沢一郎、今井雄二、近藤等氏らとぼったり顔があった。（山崎）

## ☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也  
送料 別受け 金120円也

## 中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15, 電話(943) 0311 (代表)  
大阪店・都島区相生町7, 電話(352) 3491 (代表)  
名古屋店・昭和区雪見町1~15, 電話(731) 7331 (代表)  
工場: 大阪工場(堺市), 東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで  
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

昭和四十三年度

### 「山」編集委員

編集代表 山崎安治  
委員 山崎安治 坂本一祥 吉田雄一 松田雄一 倉知全 小方弘  
担当理事 小方弘

昭和四十四年二月十日発行

東京都千代田区神田錦町  
三一二三 向井ビル  
発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎安治

頒価五十円 (233) 七四四一

振替口座東京四八二九番  
東京都港区赤坂一丁目三番六号  
印刷所 株式会社 技報堂